

# 身体表現活動の意義についての事例研究 (1)

— 韓国での実践を通して —

天理大学 塚本 順子

## 1. はじめに

身体表現は、身体を素材とし動きを媒介とする原初的、文化的営みである。想像—創造としてのからだと動きによるコミュニケーションは、自己と他者間の、あるいは自分自身の内側におけるコミュニケーションとして、今、まさにその価値についての再考が求められている。本来、人間にとってからだだけで表現すること、一人ひとりのからだでもって生きることに何が必要であるのかについて考えていきたい。

本研究は、日本を含むアジア諸国を対象に、東洋的身体観や身体教育の特質を見出すことに取り組む研究の一部である。本研究においては、韓国において身体表現活動を実施し、その体験を通して活動者自身が身体表現にどのように近づき、自分自身のからだや自己の内面、他者について、どのような気づきがあるのかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

### 2-1. 被験者

漢陽大学体育学部1年生23名  
(男子14名/女子9名)

### 2-2. 実施期間及び場所

2007年9月11日 1時間目 (90分)  
漢陽大学・体育館

### 2-3. 実践内容

自分自身のからだに働きかける準備運動から2人組みによるからだや感覚に働きかける動きをおこなった後、舞踊課題学習(走—止)を応用し、2人組で創作—発表する身体表現活動をおこなった。

### 2-4. 調査用紙

先行研究を勘案し、実践前に5項目、実践後に26項目(「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の5段階尺度)と自由記述による調査用紙への回答を求めた。調査用紙は日本語で作成したものを、韓国で使用される言語に翻訳し使用した。

### 2-5. 結果の検討

調査項目については、SPSS12.0Jにより計的分析によって検討した。また、自由記述についてもKJ法等を用い検討した。

## 3. 結果と考察

### 3-1. 実践前の5項目について

実践前に、5項目について回答を求めた。<4点満点/()の数字は100点に換算したもの>「人前で何かをすることに恥ずかしさを感じない」については1.65(41)、「人といっしょに動いたりすることが好きである」は3.35(84)、「他人との身体接触や目が合うことに抵抗はない」は2.52(63)、「自分で自分のからだのことはよくわかっている」

は2.96(74)、「他人のからだのサインを敏感に読み取れるほうである」については2.04(51)を示した。このことから、対象とした被験者は人といっしょに動くことに好意的であるといえる。

### 3-2. 実践後の活動に対する評価

「このような実践の体験があるか」については、全員がないと答えた。また、「前向きに取り組んだ」については3.70(93)、「内容は満足できるものであった」は3.43(86)、「終了後は爽快感を感じた」は3.39(85)、「作品を創作する楽しさを感じた」は3.00(75)であった。このことから、被験者は積極的に活動に取り組み、活動内容について肯定的評価をしていたと考える。

### 3-3. 統計的分析による検討

#### ① クラスター分析による検討

階層クラスター分析から得られたデンドログラムにより検討したところ、今回設定した21項目は、その関係性の強さによって、大まかに6つのグループに分かれることがわかった。第1グループは、「コミュニケーションの広がり」「コミュニケーションの深まり」「表現発見」の3項目、第2には「動き共有」「表現共有」「イメージ共有」「コミュニケーションを楽しむ」の4項目、第3は「コミュニケーション能動」「コミュニケーション受動」「イメージ発見」「他人の個性の発見」の4項目、そして第4は「表現の広がり」「自分のからだや動きの可能性を感じられた」「他人のからだや動きの可能性を感じられた」「表現の深まり」「自分の個性の発見」の5項目、第5は「動きの深まり」「イメージの深まり」「動きの広がり」「イメージの広がり」の4項目であり、そして第6は「動きの発見」というものであった。また、1と2と3グループ、4と5と6グループ同士は、それぞれに近い関係性をもつことが示された。

以上のことから、自己の表現の瞬間は他者とのかわりの中で発見すると受け止められていることや、新しいイメージを発見することと、他者の個性に気づくことは近い関係性を持っていると感じられているのではないかといえる。また、自己表現の広がりや深まりは自己や他者のからだや動きに可能性を感じ追求していく中で高まり、自分の個性を見つけることにもつながると感じられていることや、身体表現での動きはイメージを内包したものとして受け止められていることが示唆された。

#### 3-4. 自由記述についてのKJ法による検討

「決まった動きではない、自分が作る動きであったため新鮮だった」や「神経がからだの動き一つ一つに集中しているのがわかった」「これまでからだを動かす活動を楽しむより、勝負にこだわっていた」とスポーツの特性との違いを示すものがあつた。

注). この研究は平成19年度天理大学学術研究助成を得ておこなわれた研究の一部である。